

一第77編 一 碁盤の目の古都、チェンマイ^{*1}

チェンマイはバンコクの北方約720キロに位置するタイ第2の都市である。「北方のバラ」とも称される美しい古都として名を馳せる。1296年にラーンナー王朝^{*2}初代マンラーイ王により新首都としてピン川河畔に建設され、タイ北部の言葉で「新しい街」を意味する「チェンマイ」と名づけられた。以来、この地域の中心としてさまざまな民族と交流しながら、建築や仏像の様式、言葉や料理、工芸の分野などで「ラーンナー文化」と称されるタイ北部独自の文化・伝統が育まれてきた。現在でも伝統工芸をベースにタイ芸術の拠点ともなっている。周辺はタイ最高峰ドイ・インタノン^{*4}等の峰々が連なる緑豊かな山岳地帯であり、乾季（11月～1月）は平均気温が約25℃と平野部より過ごしやすく、避暑地としても大変人気がある。

四方およそ1.5キロメートルのほぼ正方形の堀と城壁に囲まれた旧市街には、多くの由緒ある寺院が点在している。最も大きく格式の高い寺院として知られるワット・プーラシンは、1345年に建立された。旧市街の中央にある



写真72-3 旧市街地にあるホテル

*1
Chiangmai: タイ北部の古都。人口約27万

*2
Kingdom of Lanna (31世紀～18世紀)

*3
King Mangrai (1278～1317)

*4
Doi Inthanon: 標高2,565mのタイ最高峰

壮大なワット・チェディルアン、ワット・ムーングンコンの本堂等が、ラーンナー王朝を代表する建築として知られている。その後、チェンマイはラーンナー王朝の首都として発展を遂げ、16世紀半ばにはビルマの属国となったが、征服者は引き続きチェンマイを首都とした。18世紀後半には、ラーンナー地域は内乱状態に陥り1780年までにチェンマイは疲弊し瓦礫と化す。その後、カーウイラは18世紀末に、同地に残っていたビルマ勢を一掃し、かつての古都を再興した。これが現在のチェンマイを構成する骨格となっている。

このタイの古都で、私たちは数多く体験した国際会議のなかでも、最も印象に残るすばらしい会議環境を共有した。アジアの19か国からなるアジア建築家評議会^{*7}（ARCASIA: ARCASTIA）のイベントである。特に記憶に残るのが理事会であった。旧



写真77-2 日除け傘

市街地に隣接するピン川に面したレストランが会場だったが、その緑陰が豊かな屋外の庭園に会議場を設え、木漏れ日を防ぐために色とりどりの唐傘が用意された（写真77-1、2、3）。陽が動くともポランティアの学生たちが傘を移動してくれる。そのホスピタリティもさることながら、木々を通り抜ける心地よい川風を感じつつ、東南アジアでは得てして寒すぎるエアコンに煩わされることもなく、いつになく柔らかい空気が支配する美しい会議を堪能することができたのである。



写真77-3 屋外のARCASIA 理事会



写真77-4 屋外会議場の設え

*7
Architects' Regional Council of Asia: 1969年創設